

## 裁判員経験者の経験を共有することの意義

平 野 潔<sup>1</sup>

### は じ め に

本プロジェクトは、一昨年度まで地域未来創生センターの「調査・研究プロジェクト」「教育プログラム開発プロジェクト」両者にまたがる、教育・研究の架橋を図るプロジェクトとして実施してきたものであり、昨年度は、「特色教育プロジェクト」として教育に特化する形で申請し、採択されたものである。今年度は、地域未来創生センターの審査種目の変更により、研究プロジェクトの中の「ネットワーク形成支援事業」に申請し、採択された。審査種目の変更はあるものの、長年に渡って行っている従来のプロジェクトの延長線上に位置づけられる研究プロジェクトである。

今年度の実施体制は、ここ数年共同研究を行っている専修大学法学部の飯考行、本学名誉教授で、現在北里大学教職課程の宮崎秀一、桃山学院大学法学部の河野敏也の3名に加え、裁判員経験者で、裁判員経験者同士の交流団体「Lay Judge Community Club (LJCC) ～裁判員経験者によるコミュニティ～」の中心メンバーでもある、田口真義氏にも加わっていただいた。田口氏は、2010年9月に東京地裁で裁判員を務められ、その後、LJCCの立ち上げにも関わり、現在もその活動を継続されている。また、裁判員経験者の「語り」をまとめた『裁判員のあたまの中』も上梓されている<sup>2</sup>。本プロジェクトの関係では、これまで、2011年10月のシンポジウム「市民・裁判員の視点から見た裁判員裁判」、2013年4月のシンポジウム「裁判員裁判の市民的基盤」、同年11月のシンポジウム「裁判員裁判へのアクセスーより裁判員を務めやすい環境整備に向けてー」、2016年10月のシンポジウム「裁判員裁判と被告人の更生」の4回に渡り、本学のシンポジウムにご登壇いただいている。また、2014年には、「裁判員経験者インタビュー」を受けていただき、本学の学生に対して、その経験をお話いただいた。

詳細な報告は後日行うこととして、ここでは、本プロジェクトの概要のみを示していきたい<sup>3</sup>。

### 1 背景と目的

2009年に開始された裁判員制度は、今年で14年目を迎え、全国で約12万人が裁判員・補充裁判員を経験している<sup>4</sup>（2024年10月末の速報値）。しかしながら、裁判員経験者の経験が社会で共有される場は限られている。本学でも、制度施行以降、毎年定期的にシンポジウムを開催し、その中で裁判員経験者の

<sup>1</sup> 弘前大学人文社会科学部。

<sup>2</sup> 田口真義編著『裁判員のあたまの中』（2013年、現代人文社）を参照。

<sup>3</sup> 例年通り、活動の詳細は、2024年3月発刊予定の報告書において紹介する予定である。なお、これまでの活動の詳細は、平野潔編『青森県の裁判員裁判と司法関係機関の姿ー弘大生による調査報告ー』（2015年）、同編『弘大生による裁判員制度と司法関係機関に関する報告書』（2016年）、同編『弘大生から見た青森県の司法および司法関係機関ー裁判員制度・更生保護・司法アクセスー』（2017年）、同編『青森県を中心とした司法関連制度の現状ー被害者支援・司法制度・裁判員制度ー』（2018年）、同編『青森県の地域司法と支える人たちー裁判員裁判・司法制度・更生保護ー』（2019年）、同編『制度施行10年を迎えた青森県の裁判員裁判』（2020年）、同編『裁判員裁判を中心とした地域司法の現状ーコロナ禍における学生の活動報告ー』（2021年）、同編『青森県における地域司法の現状と連携の可能性』（2022年）、同編『青森県を中心とした地域司法の新たな課題』（2023年）を参照。

<sup>4</sup> 最高裁判所「裁判員裁判の実施状況について（制度施行～令和5年10月末・速報）」（2023年）6頁（[https://www.saibanin.courts.go.jp/vc-files/saibanin/2023/r5\\_10\\_saibaninsokuhou.pdf](https://www.saibanin.courts.go.jp/vc-files/saibanin/2023/r5_10_saibaninsokuhou.pdf)）（最終閲覧日：2024年1月8日）。

経験を伝えているが、その範囲は極めて限定的である。

全国的には、裁判員経験者同士の交流を目的とする「裁判員経験者ネットワーク」や「Lay Judge Community Club (LJCC) ～裁判員経験者によるコミュニティ～」、裁判員経験者と市民の交流も行っている「一般社団法人裁判員ネット」「裁判員ラウンジ」「市民の裁判員制度めざす会」「大阪ボランティア協会裁判員 ACT 裁判への市民参加を進める会」「裁判員交流会インカフェ九州」などの団体が活動を行っている。しかしながら、最近では、コロナウイルスの影響もあって、活動が下火になりつつある団体も存在する。

本研究の目的は、裁判員経験者同士で裁判員の経験を共有することの意義、裁判員経験者の経験を市民（社会）と共有することの意義、そして裁判官と裁判員経験者が経験を共有することの意義を改めて捉え直した上で、全国の各団体がどのような活動をしているのか、活動の障壁となっているのはどのような点なのかを洗い出し、共有活動を活発化される方策を検討することにある。今年度は、まず、裁判員経験者の経験を共有することの意義を改めて捉え直すために、裁判員経験者同士の交流会である LJCC と、裁判員経験者と市民の交流の場である裁判員ラウンジを中心に調査を行う。

このうち、本稿では、シンポジウム「裁判員経験の共有の意義」と LJCC 青森（東北）交流会について、簡単に報告を行う。

## Ⅱ-6

## 2 実 施 内 容

### (1)シンポジウム「裁判員経験の共有の意義」

今年度のシンポジウムのテーマは、「裁判員経験の共有の意義」とした。2020 年度のシンポジウム「裁判員経験者の『体験』を踏まえた裁判員制度」において、裁判員経験者の体験を裁判員制度に反映するにはどうしたら良いかを考えた。2021 年度のシンポジウム「裁判員制度を伝える」は、前年度のシンポジウムを受け、裁判員制度や裁判員の経験をどのように伝えていくべきかについて議論した。2022 年度のシンポジウム「裁判員裁判に『経験』が及ぼす影響」は、裁判員への就任可能年齢が 18 歳に引き下げられたことを受け、裁判員に必要な経験は何かについて、様々な観点から検討をした。

これまでのシンポジウムを受け、今年度は、裁判員経験を共有することの意義は、どのような点にあるのか、そもそも経験を「共有」とは、どのようなことなのかなどを、報告やパネルディスカッションを通じて考えることとした。

今年度のシンポジウムは、2023 年 11 月 3 日（金・祝）に、弘前大学人文社会科学部 4 階多目的ホールで開催された。今年度も Zoom によるオンライン同時配信を行った。

第 1 部では、田口氏より、「裁判員経験の共有～LJCC の活動を通じて～」と題する報告をしていただいた。田口氏は、LJCC 結成に至る経緯に触れた上で、LJCC の基本理念が「共有」「還元」「公益」という 3 点にあり、それに基づいて活動が行われていることを説明された。そして、交流会においてそれぞれの経験を共有することで、多様な経験を重層的・複層的に重ねることができること、それを社会への共有という形で還元していることが紹介された。最後に、裁判員の経験は個人のものであると同時に社会の共有物であり、それを共有することで、司法だけでなく社会全体の問題点を明らかにして、より良い社会を創造することに繋がるということが強調された。

第 2 部は、飯より、「裁判員の体験談をうかがい対話できる開かれた場の重要性」に関する報告があった。裁判員経験の共有は、市民にとっては、裁判員に選ばれることに備えた情報入手と心がまえのため、学生、司法・裁判員制度の研究者にとっては、裁判員制度の知識を深めて学習、研究に役立てるため、実務法律家にとっては、裁判員＝市民の裁判員裁判への見方を把握するため、裁判員経験者にとっては、裁判員としての自身の経験を振り返り確認するために、それぞれ重要な意義を有することが指摘された。その上で、裁判員の体験談をうかがい対話できる開かれた場の重要性が強調された。

第3部は、テーマを「裁判員経験の共有の意義」とするパネルディスカッションが行われた。例年通り、コーディネーターは飯が務め、第1部でご登壇いただいた田口氏の他に、青森県内の裁判員裁判で裁判員を務められた2名の裁判員経験者、元青森地方裁判所の裁判官で、現在は宇都宮地方裁判所で裁判官をされている古玉正紀氏、青森地方裁判所の裁判官である藏本匡成氏、臨床心理士で、裁判員経験者ネットワークの西村寛子氏、そして弘前大学人文社会科学部社会経営課程経済法律コース4年の田中萌衣さんが、パネリストとして登壇した。

パネルディスカッションでは、まず裁判員経験者に対して、それぞれの裁判員経験の内容や、裁判員経験者相互の交流などについて意見を伺い、臨床心理の視点、裁判官の視点、市民・学生の視点から裁判員の体験談をどのように見ているかについて、お話を伺った。それらを踏まえて、裁判員経験の共有の意義を、それぞれの立場からどのように捉えているかをお話いただいた。

当日は、会場への来場者、オンラインの参加者を含めて40名の方々に参加をしていただいた。パネルディスカッションの最後に質疑応答の時間を設けたが、時間に収まり切らない程の質問が寄せられ、盛会のうちにシンポジウムを終えることができた。

## (2) LJCC 青森（東北）交流会

LJCC<sup>5</sup>は、裁判員経験者同士による経験の共有の場として2012年8月1日に発足し、これまで、東京、大阪、名古屋、四国、九州などで延べ40回以上の交流会を開催している。メンバーは全員裁判員経験者で、現在は、35名が参加している。交流会は、基本的には裁判員経験者による「語り」の場となっているが、「サポーター」として、裁判員経験者以外の者も参加することができることになっている。

LJCCの青森交流会は、2023年11月8日（水）に、青森市内で開催された。LJCCのメンバーは、東京から田口氏を含む2名、青森のメンバー1名を含めて3名が参加された。サポーターとして、宮崎、平野と、シンポジウムにも登壇した田中萌衣さんの3名が参加した。

交流会は、裁判員経験者それぞれが経験を語り、それぞれの経験の違いや共通点などについても情報・意見交換は行われた。また、サポーターも、ただ聞き役ではなく、傍聴の経験や専門的な知見、あるいは学生から見た裁判員制度に関する意見などを出し合い、非常に濃密な時間を過ごすことができた。

## おわりに

ここ数年、地域未来創生センターの審査種目の見直しが行われ、それに合わせて申請内容を少しずつ変更しているが、大枠としての教育・研究活動は着実に成果を上げることができている。今年度も、裁判員経験の共有の意義について、様々な調査研究活動を行うことができた。

来年度は、裁判員制度が施行されて15年目の節目の年に当たる。これまで、5年目、10年目の節目の年には青森県内の裁判員裁判について振り返るシンポジウムを開催しており、来年度は、引き続き共有の意義を考えつつ、地域における裁判員制度の意義についても教育研究活動を行っていきたい。

<sup>5</sup> LJCCに関しては、田口氏のシンポジウム配布資料「裁判員経験の共有～LJCCの活動を通じて～【副音声】」を参考にした。

Ⅱ-6

裁判員経験者の経験を共有することの意義



# シンポジウム

**入場無料**

事前申し込み不要(オンライン参加の場合は必要)

日時：2023年11月3日(金・祝)  
14:00～17:30

## 裁判員経験の共有の意義

会場：弘前大学人文社会科学部  
校舎4階多目的ホール

(Zoomによるオンライン同時配信を行います)

※会場にお越しになる場合、事前の申し込みは不要です。

※オンライン参加を希望される方は、下記“問い合わせ先”までメールで「お名前」「ご所属」「連絡先メールアドレス」をお知らせください。追ってZoom会議URLをお知らせします。



### プログラム

#### 第1部 報告「裁判員経験の共有～LJCCの活動を通じて～」

田口 真義 (LJCC～裁判員経験者によるコミュニティ～、裁判員経験者)

#### 第2部 報告「裁判員の体験談をうかがい対話できる開かれた場の重要性」

飯 考行(専修大学)

#### 第3部 パネルディスカッション「裁判員経験の共有の意義」

パネリスト:裁判員経験者、田口真義、古玉正紀(宇都宮地方裁判所)

藏本匡成(青森地方裁判所)

コーディネーター:飯 考行(専修大学)

趣旨：これまでのシンポジウムでは、裁判員の「経験」について考えてきました。今年度は、裁判員経験を「共有」することの意義は、どこにあるのかを考えたいと思います。

「共有」と言っても、同じ裁判を経験した裁判員同士の「共有」もあるかもしれませんが、違う裁判を経験した裁判員同士でも「共有」することができる部分もあります。また、裁判員の経験を市民が「共有」することもできます。あるいは、同じ裁判を経験した裁判官と裁判員の経験の「共有」もあるかもしれません。そもそも経験を「共有」するとは、どのようなことなのかも考える必要があるかもしれません。

報告やパネルディスカッションを通じて、裁判員経験の「共有」の意義を考えてみたいと思います。

主催：弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター  
問い合わせ先：弘前大学人文社会科学部・平野 潔  
tel&fax：0172-39-3199  
e-mail：k-hirano@hirosaki-u.ac.jp

弘前大学地域未来創生センター  
地域未来創生センター  
Innovative Regional Research Center

